

# 哲學研究

第七十一號

第七卷  
第二冊

カントに於ける認識客觀性の問題 (承前)

岡野 留次郎

## 六

認識の質料に關する大體の見解は、カントの先驗的統覺の解明に於て、略之を明にしたと思ふのであるが、こは認識論に於て重大なる問題であつて、輕々しく論斷するを許さないものであるから、今少しく精密に思索の歩を進め、其論理的歸結を追ひたし、思ふ。

認識の質料 *Materie*、或は素材 (*stoff*) に關する問題は、自ら感覺 (*Empfindung*) 及び内容 (*Inhalte*) の問題と結び、カントに於ては更に物自體の問題と密接に連關し進んでは直觀と悟性との相關問題に迄論究を進める必要があらう。併し此最後の直觀悟性

相關の問題は、カントに於ける認識客觀性確立の第三の而して最終の階級に屬する問題であるから、今の場合には觸れずに置きたいと思ふ。

扱て認識の質料の問題、從つて之と關聯して物自體の問題が如何に重要であるかは、此問題の解決如何に依つて種々の哲學が生ずると云ひ得るに徴しても明であらう。此意味に於て、カントの物自體は哲學上に於ける永遠の謎である。フーエンも「カント經驗理論」に於て Das Ding an sich könnte demnach als die allgemeine Aufgabe gedacht werden, deren Deutung für die Spezialprobleme den Inhalt der Erkenntnistheorie ausmacht. Und endlich kö nne man von solchen Ansicht aus die Philosophie überhaupt, als die Lehre von den „Grenzen der reinen Vernunft,“ die Lehre vom Ding an sich nennen. (3. Aufl. s. 782). 云云して居る。又ベルグソンの哲學が感覺の強度の否定より初まり純粹持續の概念に導かれ、フーエンの哲學が、感覺の強度の概念から導かれて infinitesimale Realität に依つて感覺の要求を das Urteil der Wirklichkeit に於て根底付けんとし、更に又此微分實在の概念より進んで根源(Ursprung)の思想に到達したものと見る時は、感覺從つて質料に關する考察が、如何に認識論上、從つて又哲學上、重大なるかゞ想像し得らるゝ。されば之等の問題を根本的に解決することは極めて困難なことで、該博なる研究と、深き思索

とに俟たなければならぬ。之を獨立の問題として討究するの寧ろ當然なるを感ずるのであるが、カント認識論の研究に於て、什うしても避くることの出来ない問題であるが故にこゝに粗笨ながら論究の歩を進めて見たいと思ふ。

先驗感覺論の關する限りに於ては、カントは明に認識の質料と形式とを峻別し、感覺即質料と考へ、時空を以て直觀形式となし、兩者の結合に依つて經驗的直觀が成立すると思惟したものと見るのが云ふ迄もなく忠實な解決であらう。此經驗的直觀に對立したものが *unbestimmter Gegenstand* としての現象であつて、云はゞ現象は、驗的直觀の客觀的の見方と云つて差支はあるまい。それでカントは又感覺と質料とを區別して、現象に於て感覺に應ずるものを質料と考へて居る場合もあるが (In der Erscheinung nenne ich das, was der Empfindung correspondiert, die Materie derselben. (K. d. r. V. s. 49) Doch betrifft dieses Vermögen a priori anzuschauen nicht die Materie des Erscheinung, d. i. das, was in ihr Empfindung ist, denn diese macht das Empirische aus, sondern nur die Form derselben, Raum und Zeit. Pröl. s. 61) とは見方の相違であつて結局一に歸すべきものと考へて居たことはねばならぬ。 (Raum und Zeit sind die reine Form derselben (der Anschauung), Empfindung überhaupt die Materie. K. d. r. V. s. 66)° として此認識の質料としての感覺は認識を

して後天的たらしむるもので、時空の直観形式のみが先天的に可能であり、従つてこれを純粹直観と呼ぶ。然るに現象が成立つ爲には、先づ感覺が與へられ、時空の形式がこれに加はらなければならぬ。時空の形式は、併し、感覺から生じて來たものでないが故に、其先天性は毀損せられないと考へられる。所で、認識が成立つために、其質料として感覺が外界から與へられねばならぬとすれば、そして、これを俟たなければ時空の形式は現象構成に力を揮ひ得ないとすれば、感覺は又認識成立の必須條件として、何等かの要求を許されねばならないと云ひ得る。之は既に述べた様にカント認識論の薄弱な點として、又素朴的分子として排斥せられるものであることは誰も知る所である。加之、カントには明に感覺の觸發因として外界に存在せる物自體を想定したと考へしむる多くの證左がある。尤もカントは只漠然と對照 (Gegenstände, od. Objekte) が我或は感性を觸發する (affizieren od. rühren) と云つて居る場合が多いのであるが (K. d. r. V. s. 54, 64f; Pröl. s. 60 u. s. w.) 明確に物自體の觸發を語つて居る箇所もないではない。 (die Art, wie unsere Sinne von diesen unbekanntem Etwas affiziert werden, — Pröl. s. 96, 100, u. s. w.) しかも、かやうな物自體が、不可認識ではあるが質料の觸發因として、實在的のものと考へて居たかの如き口吻すら見られないではない。

(*Pröl.* s. 67)。<sup>o</sup> 併し乍ら、斯様な意味の物自體を外界に立するとは勿論のこと、これを以て認識の質料たる感覺の原因と考へるが如きは、明に個人心理學的見地と認識論的見地との混淆じあり、許すべからざることば云ふ迄もない。若しかくの如き意味に於て與へられたる感覺をば、認識成立の必須條件として、時空並に範疇と共に、先天的要素として數へ上るとすれば、これ明に論理的矛盾であり、且又カント哲學の大なる誤解であると言はねばなるまい。一體個々切れ切れの感覺的印象が結合して表象を作り、更に複雑に結合して認識作用の如き高等なる精神作用を生ずると見るが如きは、明に心理主義的見地であつて、認識の問題の本質を逸したものである。カントの所謂時間上より云へば (*der Zeit nach*) 如何なる認識も經驗に先んずることなく凡べて經驗から初まると云はねばならないにしても、價值的順序から言つて、經驗が先に假定せられねばならぬと云ふことはない。即感覺から出發しなければならぬとは云へないのである。(K. d. r. V. 3. 647)。<sup>o</sup> 即我々の經驗認識 (*Erfahrungserkenntnis*) は印象を通じて受取る所のもの (*das, was wir durch Eindrücke empfangen*) を、我々固有の認識能力が、此感性的印象によつて喚起され、夫自らの中から出し、與ふるもの (*das, was unser eigenes Erkenntnisvermögen (durch sinnliche Eindrücke bloss veranlasst) aus sich selbst hergibt*) を

の結合せるものと考へ得る。此根本素材 (Grundstoff) と區別せられた附加物 (Zusatz) こそは、カントが質料と對立せしめた形式であり、經驗的 (das Empirische) を作る所の感覺としての質料を含まないが故に、後天的でなくして先天的であると考へられる。

併し、此形式の加はらない所の素材と考へられた感覺が、直觀形式を通じて與へられねばならぬと云ふことが認識成立の必須の條件であるとするならば——そしてこれは仕うしても許さねばならないと思はれる——認識の先天性は爲に脅かされはしまいか。「概念のない直觀は盲目であるが、内容のない思想は空虚である」が故に何等かの意味に於て内容は許されなければならない。單なる論理的形式から、個々の科學が取扱つて居るやうな現實の認識が仕うして根底付けられやう。事實とか現實在とか經驗とかは、個々の科學に取つて動かすことの出来ない出發點であり、之を離れては認識は空虚なる概念に過ぎない。夫にも拘らず經驗的を作る所の感覺が認識成立の條件として許すことは、認識の先天性を毀損すると考へられねばならない。

此矛盾は仕う解決すべきであらうか。

一體カントは質料を直に感覺と考へ、形式を有しない根本素材となし、同時に之を内容と思惟したのであるが之等の考方の中に未だ不十分な點がありはしないか。カントの感覺が全然形式の加はらない質料を表示するとすれば、そしてそれが經驗的を作る感覺的印象を意味するとすれば、それは固より先天的要素として認識成立の條件とすることは出来ない。夫にも拘らず何等かの意味で認識の内容を考へねばならぬとすれば、カントの感覺に潜む問題を見出して、更に精密に考察しなければならぬ。リッケルトが言ふ様に *das Wahrgenommene* が一般に認識として論理的意味を持つが爲には *das für wahr Genommene* と考へられることも云ひ得やう。 *das Gegebene* と *das Wahrgenommene* とかが *das für wahr Genommene* と考へられなければならないならば、其根底には、云ふ迄もなく當爲を許さねばなるまい。(Gegenstand der Erkenntnis, 3. Aufl. s. 378ff.)。併しかく考へられた質料とは要するに形式ではないか。更にかゝる「知覺されたもの」から「直接與へられた知覺」(die unmittelbar gegebenen Wahrnehmung)を區別し得るとも云へやう。併し如何に言葉を以て飾らうとも、既に或言葉を以て云

ひ現はす限り一般のものである、眞に知覺せられただけの内容、其者は何等の意味に於ても一般的でなく、眞に individuell でなければならぬ。これを「青」「赤」と云ひ現はしても既に一般的な形で云ひ現はされて居る。否、「此」と云ふ言葉、個々」と云ふ言葉さへ考へ得べき最大の一般性を有するとも云ひ得るであらう。かく考へて來れば「知覺されたもの」と云つても、「感覺」と云つても、扱ては「此青」「彼赤」と云ひ現はしても、凡へて形式を假定すると云はねばならぬ。否、「内容」と云ふ言葉が既に形式を含むと云はねばならない。故に論理的に云つて、内容を許し得るとすれば、それは Form der Inhaltlichkeit としてある、或は Form der Gegebenheit としてある。然らば、何等の意味に於ても形式を有しない内容、或は質料、或は素材は、これを如何に考ふべきか。der blosser Inhalt 或は Inhalt des Inhalts とも云ふべきものは、これを如何に考ふべきか。こはリッケルトに取つて das logisch Indifferente und Unausagbare である。Der „reine“ Inhalt ist das Namenlose. (Gegenstand der Erkenntnis, 3 aufl. 3. 145; Logos Bd. II, Heft I. Das Eine, die Einheit und die Eins, s. 33) 卽リッケルトはカントの感覺の中に尙問題を見出して、其中に「所關性」或は事實性の形式に這入つた内容 (Inhalt in der Form der Gegebenheit oder Tatsächlichkeit) を見出した。リッケルト自も云つて居るやうに、彼はカントが爲したより一段



深く下りていつたのである。カントが全然無形式と見た質料は *das Unausgabare* として認識の領域以外に排除せられると共に、内容としての感覺の要求は所與の範疇に依つて其先天性の根據を獲得したのである。

併し翻つて考へるに、如何に不可言的としても、又如何に絶對的の非合理性としても、これを形式に内容性を與へるものとして認めなければならぬとすれば——そしてカントの場合と同じくこれは仕うしても許さねばならないこと——思はれる——かくの如き内容の内容が、形式に對して爲す所の或要求を全然拒否し去ることは可能であらうか。或は恚うも考へられよう。認識論の關係する所は總じて個々の具體的所與の存在の仕方に關係するのであつて、個々の事實の内容的規定に關係するのではない。「此青が與へられる」と云つても、「此赤が與へられる」と云つても、其内容は異なるであらうが、其形式から云へば共通である。かやうな一般的な内容性の形式を論ずるのが認識論の關係する所であつて、場合場合に依つて異なる所の内容、即ち青が彼赤から區別せられ、或は此青が彼赤から區別せられる所以の内容的關係は個々の科學の關心する所であるとも考へられやう。(Gegenstand, s. 373。併し「此青が與へられる」と云ふこと、「彼赤が與へられる」と云ふこと、が内容的に見て互に異るとしても、其

内容が直に此青彼赤と呼ばれ、しかもこれが非合理性として思惟の限界に屬すると云ふことが仕うして云ひ得るであらうか。(p. 20)。個々の科學が取扱はんとして居るのは、判斷の内容的方面であると云ひ得るにしても、内容其者のみを取扱ふとは云はれまい。既に此青を彼赤から區別し或は他の青から區別するところに、否更に進んで云へば、此青として定立する所に既に内容のみを見てゐないと云ひ得るではなからうか。das Wahrgenommene が das für wahr Genommene として意義ありと見るならば、dies Blau は dies für Blau Wahrgenommene として意義ありと見るべきではないか。既に「青」とか「此青」とか呼ぶ所に形式の附加を證するとはリッケルト自身も許して居るではないか。之を要するに絶對的に非合理性と名け得べきものは「此青」とか「彼赤」とか名け得べき、或はかゝる名稱によりて意味し得べき如何なるものであつてもならない。即正に「不可言的」先概念的が最も適當な云ひ現はし方であらう。かやうに不可言的であるに拘らずこれを「此青」とか「此赤」とかを以て現はさんとし、或は眞に個々のものとして考へねばならないと云ふのは抑々如何なる理由に基くのであらうか。

## 八

併し又恁うも考へられよう。赤が青から區別せられるとするならば赤が青であつて青でない所の或者がある。これを赤と云へば既に一般的であらうが、かゝる言表によつて青と異らしむる或者は即眞の内容ではないであらうか。云ひ換へれば此瞬間彼瞬間に獨一の具體的經驗として體驗された此赤彼青こそは即眞の内容ではないか。併し此瞬間彼瞬間の具體的の赤青の體驗とは抑々何であるか。

恁う考へて來ると認識の問題に非常な危機が迫つて居るのに氣付かれやう。それは心理的としての感覺が瞬間的の具體的體驗と云ふ名目の下に窃に認識の質料たらむとする不當なる謀反が企てられつゝあるを知るからである。既に瞬間的と云ふ言葉が斯様な危険性を有力に物語つて居る。即心理現象として考へられた感覺が認識の質料として考へると云ふ謬見が何時の間にか紛れ込んで居るのである。之は果して許さるべきであらうか。精神物理的主觀が外界の刺戟に依つて觸發せられた感覺内容が如何に具體的であるとは言へ、認識の内容の内容としての眞の個々―個々と云ひ現はすことさへ出來ない個々―要するに不可言的としての質料を

意味し得るであらうか。かやうな心理學的感覺内容を先天的條件として數へ上ることは固より不可であらう。併し其不可なる所以が同時にかくの如きものは形式を俟たないでは意味のないものであり、従つて眞に不可言的として現はすべき當のものでない證據ではないか。夫にも拘らず、併し、プラトールが感覺の誘發(Veranlassung)を説き、カントが質料として感覺を立した思惟動機は何處にあるのであらう。換言すれば何等かの意味に於て具體的個々の心理的内容としての感覺が何故に認識の質料たらむとする要求を含蓄するのであらうか。

翻つて考へるに心理學で云つて居るやうな感覺は、外界の刺戟の凡てに對應して存在するとは考へられない。感覺の及び得ない範圍に屬する客觀的の刺戟は存在しないと云ふべきであらうか。之固より不合理のことである。此簡單なる一事を見て、心理的的感覺内容が認識成立の一必須條件として許し得ない事は最も明なことである。況んやかゝる意味の感覺内容より出發し、之を根本豫想とする有ゆる種類の感覺論は其根底を奪はれねばならない。併し、それにも拘らず尙何等かの意味を保有するとすればそれは現實的(das Wirkliche)に對する指標(Index)としてあるとも考へられやう。かゝる解釋を施したのが即ユーエンである。Die Empfindung ist

nicht das Wirkliche, aber ein Index des Wirklichen, und nicht bloss der lauteste, sondern auch zur Anspruch berufene. Kants Theorie der Erfahrung. 3 aufl. s. 756) 卽感覺は現實在を指示し、其根底付けを要求し、所與のエネルギーを告知する。觸發すると考へられる所の外界の事物の現實在性の標識である。かゝる感覺の要求は、假令不當ではないにしても、其要求は遂に要求であつて Leistung はなし得ない。加之之は遂に要求に止まり指標に止まるが故に、現實的が持てる有ゆる内容を悉く告知することは出来ない。Wir haben es erwogen, wie die Empfindung in der Tat den Inhalt, auf den sie bezogen wird, nicht einmal vollständig, weder qualitativ noch quantitativ auch nur anzumelden vermag. Die Empfindung sammelt; das Denken erst erschafft das Wort. Die Empfindung bezeichnet einen dunklen Drang; wohin sie zielt, das kann erst das Denken beleuchten; das Denken erst gibt jenen Streben die Richtung auf das Ziel, (Logik der reinen Erkenntnis. 2 aufl. s. 469)。

其更に我々は問題を再び元へ返さう。瞬間的に具體的に經驗される處の感覺内容が單に現實的なるものゝ指標に過ぎないとしても、尙其要求を許す以上は、これを eine Erscheinung der Bewusstheit として Mythos として排斥し去らんとしても尙何等かの意味に於て思惟の獨立性を毀損するものとして考へられねばなるまい。之を防

ぐ爲には思惟自らの中に感覺の要求と並に其満足とを保證するに足る創造性が附與されねばならない。併しこは如何にして可能であらうか。

一體「現實的」と云ふことが我々の最初からの問題であつた。感覺の要求を認めねばならぬと云ふことも此「現實的」を如何に思惟の中に根底付け得るかの問題を指示するからである。そして此「現實的」を思惟の中に根底付けると云ふことは、即ち「一般的」(das Allgemeine)の中に如何にして「個々の」(das Einzelne)を確立し得るかの問題と同じい。そこでリッケルトの所謂眞に個々のものとは如何に考へ得べきかが問題とならねばならない。眞に具體的な個々とは感覺的印象であらうか。それは只 Bewusstheit である。只告知するのみである。然らば其感覺の告知する所の「現實的」を作り出すものは何か。コーエンに依ればそれは量 (Grösse) である。die Wirklichkeit aber bedeutet in der Tat nichts anderes als die Grösse. Sie bedeutet eben nichts anderes als das Einzelne; und das Einzelne, das ist die Grösse. (Ibid. s. 479) 併しこれは單なる Gleichheit としての量であらうか。Das Einzelne は Eins を意味するか。否それに止まつてはならない。das Unendlichkleine に至らなければならぬ。「現實的」は微分實在迄に依つて其根底を得る。「現實的」が要求する「個々の」は無限小でなければならぬ。こは零ではない即無ではな

い。併し一でもなければ二でもない。即常數ではなくて零を極限とした變數である。如何なる小なる價を與へても尙小となり得る數である。そは即量ではあるが質的意味を持つた量である。

かく考へて來ればカントが外界から與へらるゝと素朴的に許容した根本素材としての感覺は單なる *Bewusstheit* に過ぎず、純粹思惟に對して若し意義ありとすれば、それが只現實的の指標たる處にある。しかも此要求も結局思惟其のものゝ要求と考へられねばならない。そして *das Urteil der Wirklichkeit* がかゝる要求に論理的位置を與へる。かやうにして眞に現實的なもの、眞に個々のものは *Eins* ではなくして *infinitesimale Realität* でなければならぬ。(Ibid. s. 493)。そは一に固定せんとすれば無に逃れ多を作るものである。即ちは單なる *Einheit* でなくカントの意味の *synthetische Einheit des Mannigfaltigen* でなければならぬ。そは多を作る一である。質的雜多を包容し得る一である。So liegt denn in dem Urteil der Wirklichkeit, wie sehr es sich auf die Empfindung bezieht, bei Lichte besehen, eine Selbstbezeugung des reinen Denkens. (Ib. s. 491.) かくて我々は個々の「*質*」を探つて却つて「*一般*」を得た。(So führt das Einzelne zum echten Allgemeinen (Ib. s. 494)。此微分實在の概念こそコーエンを導いて根源の思惟に至らしめ、無限判

斷の中に凡べての認識の根底を置かしめたものではないか。(Kants Theorie. s. 790)  
 (尙カントとコーエンに就いては機會あらば別に論じて見たいとも思つて居る。)

## 九

以上我々の論述の目指す所はカントに於て物自體の觸發に依つて與へられると見た認識素材としての感覺が論理的に不整合な分子を含有して居るとするならば、これを如何に考へ如何に徹底せしめ得べきかであつた。そして其爲にリッケルトやコーエンの思想を粗雜ながら吟味して遂にコーエンの微分實在の概念に迄到達したのである。此立場からは最早や認識の質料は純粹思惟に外的なものとして與へられてはならない。それは主として問題として解されなければならぬ。das Gegebene は das Aufgegebene である。思惟によつて要求されたものである。純粹思惟其物の要求の表示に外ならない。之を約言すれば、質料は形式の相關概念である。形式に對立し形式を全然離れた質料とは要するに Bewusstheit に過るなく。Bewusstheit が Mythos であり Bewusstsein が Wissenschaft であるならば哲學は Bewusstsein の學として Bewusstheit から初めるべきは出來ない。Materie steht in Gegensatze zur Form; sie kann



nicht rein, sein noch sein werden, ausgenommen dadurch den Übergang in die Form bei welchem sie selbst verschwindet. (s. 463)。<sup>o</sup> 又リッケルトは言ふ、Der Inhalt überhaupt bedeutet deshalb auch noch nicht ein Alogisches, das zu den formalen Bestandteilen des Gegenstandes überhaupt als etwas Neues hinzutritt, sondern nur den logischen „Ort“ für das Alogische, und dieser gehört notwendig mit zur Gegenständlich oder zur Form des Gegenstandes überhaupt. (Das Eine etc. s. 32—33)

之を要するにリッケルトもコーエンも、カントが素朴的に外界に實在的として立した物自體を否定すると共に、其觸發によつて生起すると見られた感覺的所與を、一は所與の範疇に依り、他は現實性の判斷によつて、其論理的 position を根底付けんとしたものと云ひ得よう。之と同時に絶對的非合理性としての純内容或は意識性は認識の領域以外に放逐さるゝに至つた。

併し更に進んで考へるならば如何に純内容として又意識性として認識の領域に於て認容せざらむと努力をしても、尙不可言的として或は要求の表示として認めなければならぬとすれば、換言すれば「不可言的」と言はねばならぬとすれば、又「個々」と云ひ得ない「個々」と云はねばならぬとすれば、これは一體何を語るものであらう。個々の具體的の感覺的内容、或はコーエンの所謂「刺戟」に對する「反應」としての感覺が、絶對

的の非合理性或は最も直接的な體驗と考へられるならば、こは明に價値の根底として許さるべきものではない。之をしも主張するならば、こは明に價値的順序と事實的順序との混合であらう。併し眞に具體的な意識作用は、果してかくの如き心理學的の個々獨立に經驗せられると見られた切れ切れの感覺的事象の經驗であらうか。心理學者の考へる如き感覺は却つて抽象的思惟の產物と言はねばなるまい。眞に具體的な意識作用を却つて意味の體驗の如きに求むるならば、必ずしも作用を離れて價値を立せねばならぬとは限らないと思はれる。一體作用を離れ作用を超越した價値を立すると云ふことは作用を個人心理學的作用と解するからである。「個々」と云ひ得ない「個々」を尙、此「青」「彼赤」の如き言葉を以て意味し得るが如く考へるのは (Gegenstand. s. 373) 絶體的非合理性としての純内容の中に、潜かに感覺的印象を忍び込ましめる爲ではあるまいか。或は感覺を以て感觸するものとして考へられた外界を告知すると考へるのは、これ明に個人心理的の感覺内容である。之を意識性として思惟以外に放逐せんとする思惟動機は正に「直接的」を感覺内容と解するの偏見に座しはしないか。もし認識の質料或は素材より如何なる意味に於ても外的に與へられるものと云ふ考を全然排斥するならば、それは最早や思惟の限界として何等の

意味に於ても思惟の彼岸に立せらるべきではなくて、却つて思惟の根底に許されなければならぬのではないか。併しかく云へば、こゝは Inhalt überhaupt から inhaltlich bestimmter Inhalt に移つたもので、又對象に於て formale Faktor der Inhaltlichkeit を見るのみでなく、Inhalt der Form, Inhaltlichkeit 或は Inhalt des Inhalts を見んとするもので、純論理的或は理論的立場を見捨てるものと非難されるかも知れない。(das Eine etc. s. 33)。

併し「青」とか「快」とか云ふ言葉に依つて現はされる意味の外に、ein alogisches Element, den „reinen,“ von keiner Form berührten Inhalt を認めなければならぬとすれば——假令それは Namenlose であるにしても——純論理的對象と考へられるものゝ根底にも非論理的或者を認めなければならぬのではないか。其かく考へ得ない理由は、感覺的内容を直接的とし、不可言的と見なさんとする暗黙の許容に基くのではなからうか。更にコーエンに至れば非論理的要素の拒むことの出来ない力を認めて居ると云ひ得る。併し其力は要するに論理的其物に内在するものと思惟する。感覺の要求は精密には思惟の要求と考へられねばならぬと云ふ根底には、感覺が刺戟に對する反應と考へて居るからである。固より感覺と云ふ以上は心理學的の意味に解釋すべきであるとも云ひ得やうが、もしそうならば、メッサーも云ふ様に感覺は所與と區別し

て用ゐられなければなるまい。(August Messer, Einführung in die Erkenntnistheorie. 2 Aufl. S. 109). かゝる詮議は單なる文字上の争ではない。實に sachliche Bedeutung を有する。何者、所與を何等かの意味に於て心理的感覚内容と考へることを暗黙の中に許容するならば、所與が如何に課題と考へられても、尙直接的が論理的の限界として、何等かの意味の Wand と考へらるゝに至らしむる思惟動機を形づくるからである。

以上の迂餘曲折を経て我等は遂に奈何の結論に導かれたのであらう。我等の見る所では、最も直接的なるものは、思惟に對立して、思惟が打勝行くべき Wand ではない。却つて思惟の根底に存し、思惟の創造性を保證する所の當のものでなければならぬ。論理的其者を自己の中に立し、直に之に對する内容として、或は質料として自己を現はす所のものである。形式と云ひ質料と云ふも、結局はかゝる具體的普遍者の兩面性の表示に外ならない。見方の差異に過ぎないのである。具體的普遍者とは即カントの雜多の綜合的統一としての自覺に外ならぬ。そは多を作り出す所の一である。最も普遍的であると共に最も個々のであり、最も具體的であると共に最も抽象的であるとも云へやう。其普遍の相に即して云へば即價值、個々相に即して見れば即直接的總じては三即融一無碍、最も具體的なる直接的實在の真相である。

ベルグソンの云ふ様に一々の要素が全體を代表し、しかも互に滲透融合せるもの、實に一にして多、多にして一、自我の眞に生ける姿深き私の獨自の眞面目である。

カントの先驗的自我をかくの如く解することは、古き形而上學への復歸を意味すると思はれるかも知れない。然し乍らカントの立した質料としての感覺を其論理的破綻より防護し、眞に先驗的自我の自發性、創造性を徹底せしむる爲には、そして外より内に物より我に轉じたカントのコペルニクスの轉回を其最も深き思惟動機に於て vollziehen せんが爲には、かく解するより外はあるまいと思はれる。そは古き形而上學への復歸を意味せず、新しき形而上學への躍進を意味する。

以上の論述に依つて略認識の質料は如何なる意味に於て其先天性を主張し得るかの根據を明とし得た積りであるが、我々は更に進んで他の先天的要素に就きても等しくかゝる論究の歩を進めなければならぬ。(未完)